

# 平安京左京九条大路跡・烏丸町遺跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







# 平安京左京九条大路跡・烏丸町遺跡

2010 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、学校新築工事に伴う平安京跡・烏丸町遺跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

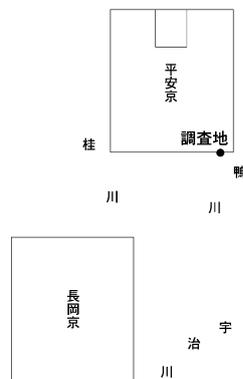
平成 22 年 4 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

# 例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京九条大路跡・烏丸町遺跡
- 2 調査所在地 京都市南区東九条下殿田町 56
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2010年1月4日～2010年2月12日
- 5 調査面積 486 m<sup>2</sup>
- 6 調査担当者 上村和直
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「梅小路」・「京都駅」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 上村和直
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。
- 15 協力者 矢野健一・谷上真由美（立命館大学）（敬称略）



(調査地点図)

0 2 4km

# 目 次

1. 調査経過	1
2. 遺 跡	2
(1) 位置と環境	2
(2) 周辺の調査	4
3. 遺 構	5
(1) 層 序	5
(2) 検出遺構の概要	5
(3) 第1面の検出遺構	11
(4) 第2-1面の検出遺構	11
(5) 第2-2面の検出遺構	11
4. 遺 物	12
(1) 遺物の概要	12
(2) 土器類	12
(3) 土製品	20
(4) 石器	20
5. ま と め	22

# 図 版 目 次

図版1	遺跡	1	第1面全景（西から）
		2	第2面全景（西から）
図版2	遺構	1	流路11（南から）
		2	流路11 弥生土器出土状況（北から）
図版3	遺物	1	縄文土器
		2	弥生土器 壺形土器1
図版4	遺物	1	弥生土器 壺形土器2
		2	弥生土器 甕形土器1
図版5	遺物	1	弥生土器 甕形土器2
		2	弥生土器 鉢形土器
図版6	遺物	1	弥生土器 蓋形土器
		2	石器

## 挿 図 目 次

図1	調査地位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：1,000）	2
図3	周辺調査地位置図（1：2,500）	3
図4	調査前全景（南西から）	4
図5	調査状況（西から）	4
図6	調査区北壁断面図1（1：50）	6
図7	調査区北壁断面図2（1：50）	7
図8	調査区東壁断面図（1：50）	8
図9	第1面遺構平面図（1：300）	9
図10	第2面遺構平面図（1：300）	10
図11	縄文土器・弥生土器拓影・実測図（1：4）	14
図12	弥生土器拓影・実測図（1：4）	15
図13	弥生土器拓影・実測図（1：4）	16
図14	弥生土器拓影・実測図（1：4）	17
図15	弥生土器・土師器・須恵器拓影・実測図（1：4）	18
図16	土製品実測図（1：4）	20
図17	石器実測図（1：2）	21

## 表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	12

# 平安京左京九条大路跡・烏丸町遺跡

## 1. 調査経過

調査に至る経過 京都市南区東九条下殿田町 56 に所在する京都市陶化中学校における、京都市立南区東九条地域小中一貫教育校新築工事に先立って、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）は、この地域が平安京および烏丸町遺跡に含まれ、周辺の調査から遺構が残存すると予想したため、試掘調査を行った。この結果、グラウンド南側は大きく攪乱を受けるが、グラウンド北側は遺構が残存すると判断した。このため、文化財保護課は教育委員会に発掘調査を指導し、これを受けて、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施することとなった。

調査経過 調査は 2010 年 1 月 4 日から開始した。調査対象地内では、グラウンド北側が遺構の残存が良く、また九条大路南築地（羅城）側溝にも推定されることから、グラウンド北寄りに逆L字形の調査区を設定した。今回の調査は、平安時代の九条大路とその関連遺構の検出、および烏丸町遺跡に関わる遺構の確認を主目的とし、その前後の当地の変遷を明らかにすることとした。

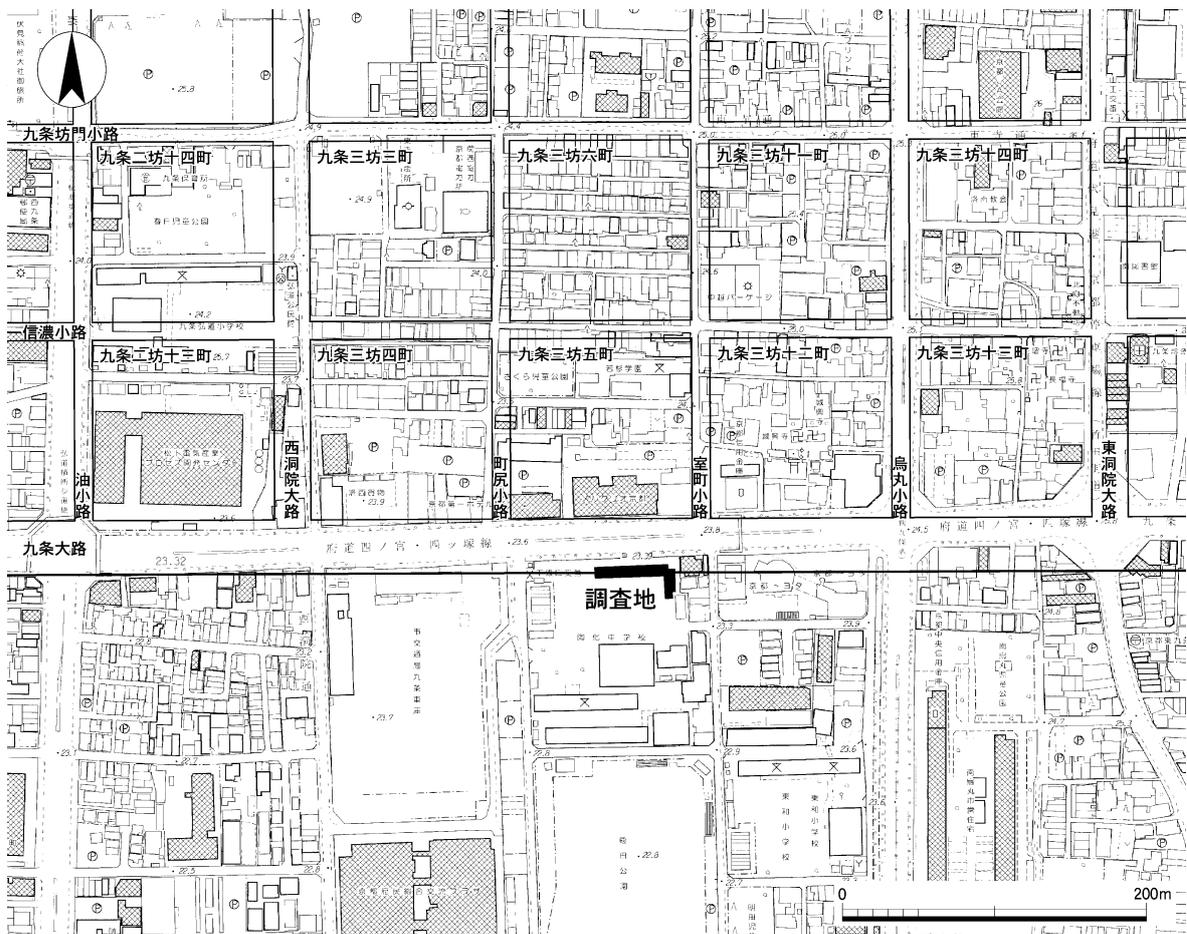


図1 調査地位置図 (1 : 5,000)

調査は、近世以降の遺構面（第1面、現地表下約0.2～0.5m）まで機械掘削し、その後手掘りで調査した。第1面調査終了後、中世以降の遺構面（第2-1面、現地表下約0.3～0.5m）まで包含層を掘り下げ、遺構を調査した。その後、飛鳥時代以前の遺構（第2-2面）を調査した。各遺構面ごとに実測図と写真撮影により記録を行った。最後に断割により下層の堆積状況を確認し、断面写真撮影・実測などを行い、2月12日に調査を終了した。なお、調査中には、陶化中学校生徒の見学授業を実施し、調査成果の公表に努めた。

## 2. 遺 跡

### (1) 位置と環境

調査地一帯は、鴨川によって形成された扇状地上に位置し、北から南に緩やかに下がり、調査地周辺の標高は約23.4mである。調査地は鴨川から約900m西側に位置する。周辺地域では、縄文時代晩期から中世までの遺物が出土し、調査地北東の調査では弥生時代の溝、河原町・九条交差点付近では古墳時代の竪穴住居が検出され、烏丸町遺跡として認知されている。本調査地は、遺跡範囲の南端に位置する。

調査地は、平安京の条坊では左京九条大路南辺に推定できる。調査地の西側は町尻小路、東側は室町小路の南側延長にあたり、九条大路の北側は左京九条三坊五町である。平安時代の五町域および九条大路に関する文献史料は確認できず、居住者などは不明である。調査地周辺では、平安時代後期以前の遺構は少ない。平安時代後期から室町時代には、当該期の遺構・遺物が多数検出され、活発に利用されたことが窺える。

中世以降は、遺構・遺物がしだいに減少している。これは、農村化したためと考えられる。近世の当地域は、東九条村と呼ばれ、蔬菜などの栽培地であり、特に藍玉の主要生産地として有名であった〔『雍州府史』〕。江戸時代の具体的な様子は不明であるが、五町城南辺の立会調査では、

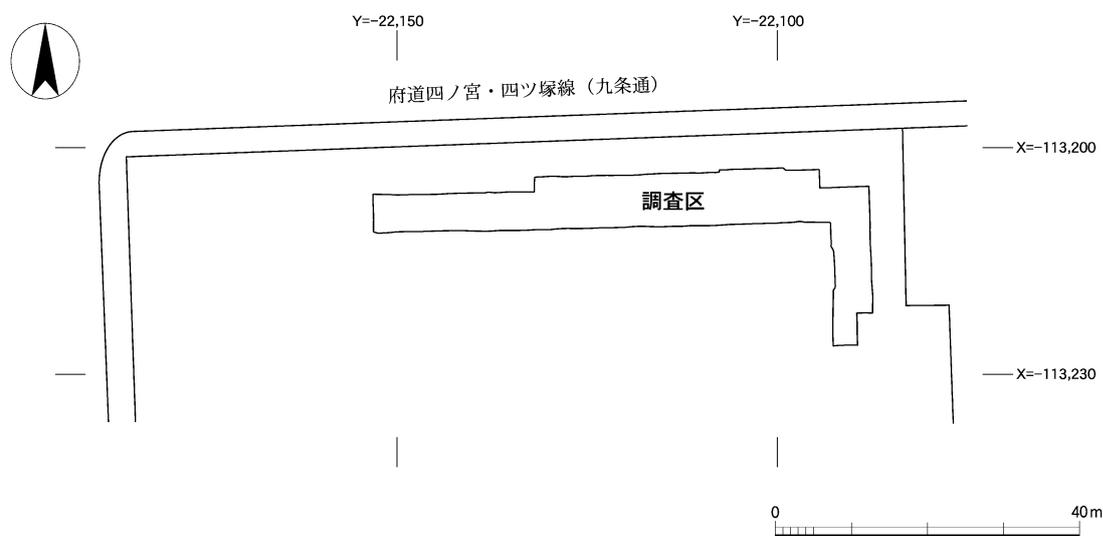


図2 調査区配置図 (1 : 1,000)

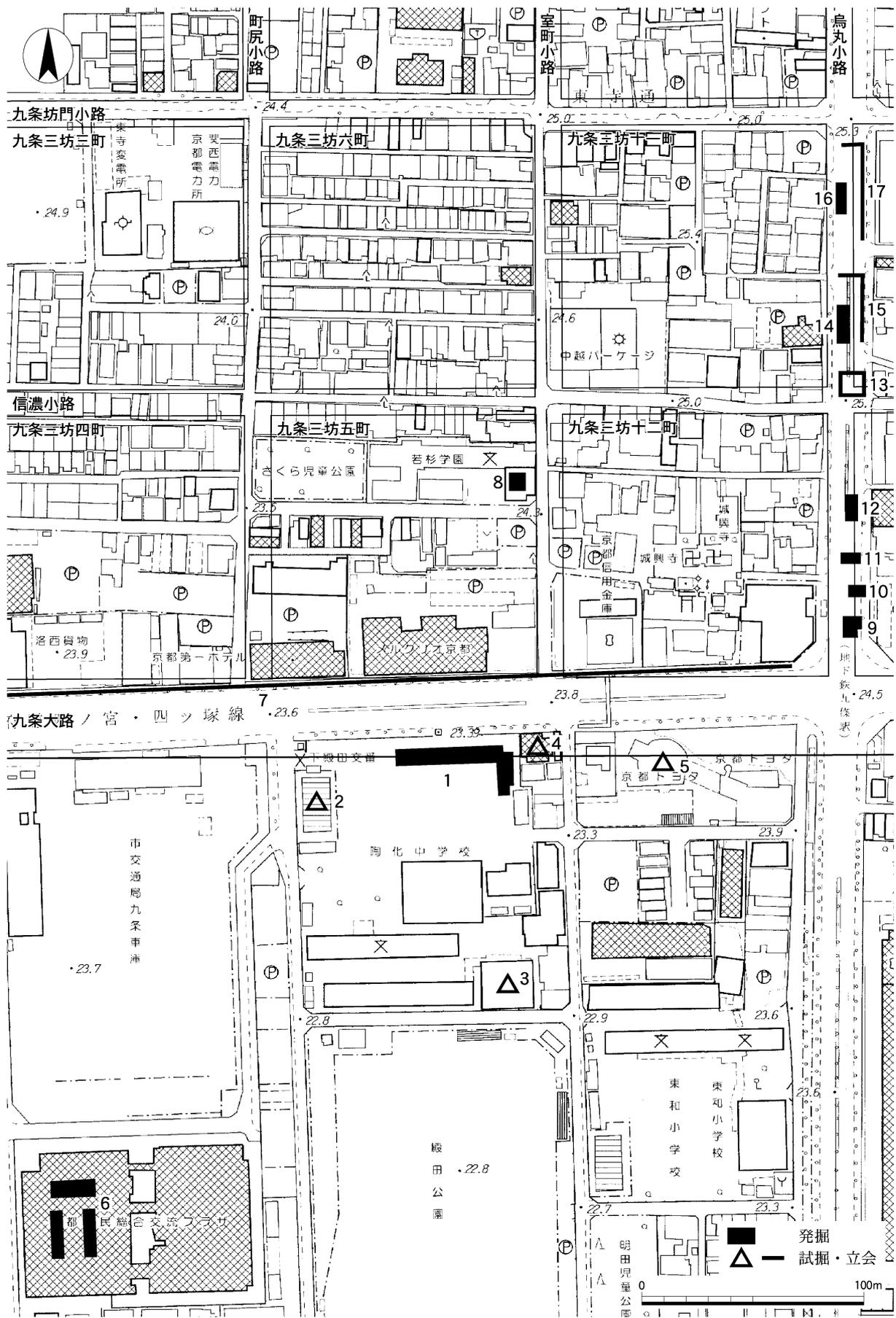


図3 周辺調査地位置図 (1 : 2,500)



図4 調査前全景（南西から）



図5 調査状況（西から）

九条通北側溝を検出した<sup>1)</sup>。

明治時代には当地に寺子屋が造られ、その後、昭和初期に尋常小学校、昭和27年に陶化中学校となり、現在に至る。

## （2）周辺の調査（図3）

これまで、調査地（図3-1）周辺で行われた発掘調査および主要な試掘・立会調査の概要を平安京の条坊を準用して述べる<sup>2)</sup>。

陶化中学校内では、2回の試掘調査を実施した。校内北西部の調査（プール、図3-2）では、弥生時代中期の包含層を検出した<sup>3)</sup>。校内南東部の調査（校舎、図3-3）では、遺構・遺物は検出していない<sup>4)</sup>。調査地北東側の試掘調査（図3-4）では、中世の包含層・流路を検出した<sup>5)</sup>。さらに東側の試掘調査（上新電機、図3-5）では、中世の包含層を検出した<sup>6)</sup>。調査地南西側の発掘調査（テルサ京都、図3-6）では、江戸時代以降の畝を検出し、下層で弥生時代から中世の包含層を検出した<sup>7)</sup>。

調査地北側の立会調査（九条通北側下水道、図3-7）では、弥生時代の包含層、室町時代の井戸・土坑、近世の九条通北側溝などを検出した<sup>8)</sup>。さらに北側五町の発掘調査（若杉学園、図3-8）では、近現代の畑を検出し、下層で弥生時代から中世の流路堆積層を検出した。調査地北東側の烏丸通西側の発掘・立会調査（地下鉄烏丸線建設）では、九条三坊十三町西辺部（No.81～83・86）（図3-9～12）で、平安時代中期の土坑・柱穴、平安時代後期の整地層・宅地内溝、平安時代後期から鎌倉時代までの烏丸小路東側溝・路面・土坑・ピット、鎌倉時代の井戸、室町時代後期の南北壕を検出した。また、後世の遺構埋土から平安時代前期の土器・銭貨が出土した<sup>9)</sup>。九条三坊十四町西辺部（No.84・85・立26～28）（図3-13～17）で、弥生時代の北東から南西方向の溝（図3-13）、平安時代後期から鎌倉時代までの信濃小路北側溝・烏丸小路東側溝・溝・柱穴・落込み、中世から近世までの井戸・溝・土坑・柱穴などを検出した。また、後世の遺構埋土から縄文時代晩期の土器・石器がまとまって出土した<sup>10)</sup>。

### 3. 遺 構

#### (1) 層 序 (図6～8)

調査地の基本的層序は、地表面から約 0.2～0.5 mまでグランド整地層（第1層）および、現代整地層・黒色土層（第2層）で、第3層は黒灰色砂泥層（耕作土：厚さ約 0.1 m）である。第4層は調査区西側にのみ存在し、暗灰黄色砂礫層（包含層：厚さ約 0.7～1.0 m）で、磨滅した弥生土器・須恵器などを含む。第4層の下は、第5層黄灰色砂礫層（1 m以上）である。第5層は無遺物の地山である。

調査は、第3層上面を第1面、第4層上面を第2面とした。第1・2面の検出高は、各地点でほとんど差はなく、ほぼ平坦である。第2面上面の標高は、調査区中央で約 22.7 mである。

#### (2) 検出遺構の概要

調査で検出した遺構は、第1面4基、第2-1面6基、第2-2面2基、計12基である。時期は中世以降と飛鳥時代以前に分かれ、遺構数は中世のものが多く、規模と出土遺物量からは飛鳥時代以前の遺構が中心である。

第1面では、全面で近世以降の耕作土を検出した。調査区西側では、畑の畝と推定できる東西方向の溝を数条検出した。

第2面では、中世以降と飛鳥時代以前の遺構を同一面で検出し、中世以降の遺構を第2-1面、飛鳥時代以前の遺構を第2-2面とした。中世以降の遺構には、調査区西側の東西・南北溝、中央部の大規模な落込みがある。溝は耕作に関係すると考えられる。中央部の落込みは、調査区が狭いため、規模や平面形は明らかでない。堆積の状況や下層の流路との関係から、前代の流路の凹みに堆積したと考えられる。

飛鳥時代以前の遺構には、調査区中央部の弥生時代から飛鳥時代の流路、東部の弥生時代の落込みがある。東部の落込みは、調査区が狭く周辺に攪乱が多いため、規模や平面形は明確ではない。

以下、各遺構面に分けて主要な遺構を報告する。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
弥生時代	落込み12	
弥生時代～飛鳥時代	流路11、第4層西側（包含層）	
中世	落込み5・6、溝7～10	
近世以降	溝1～4	

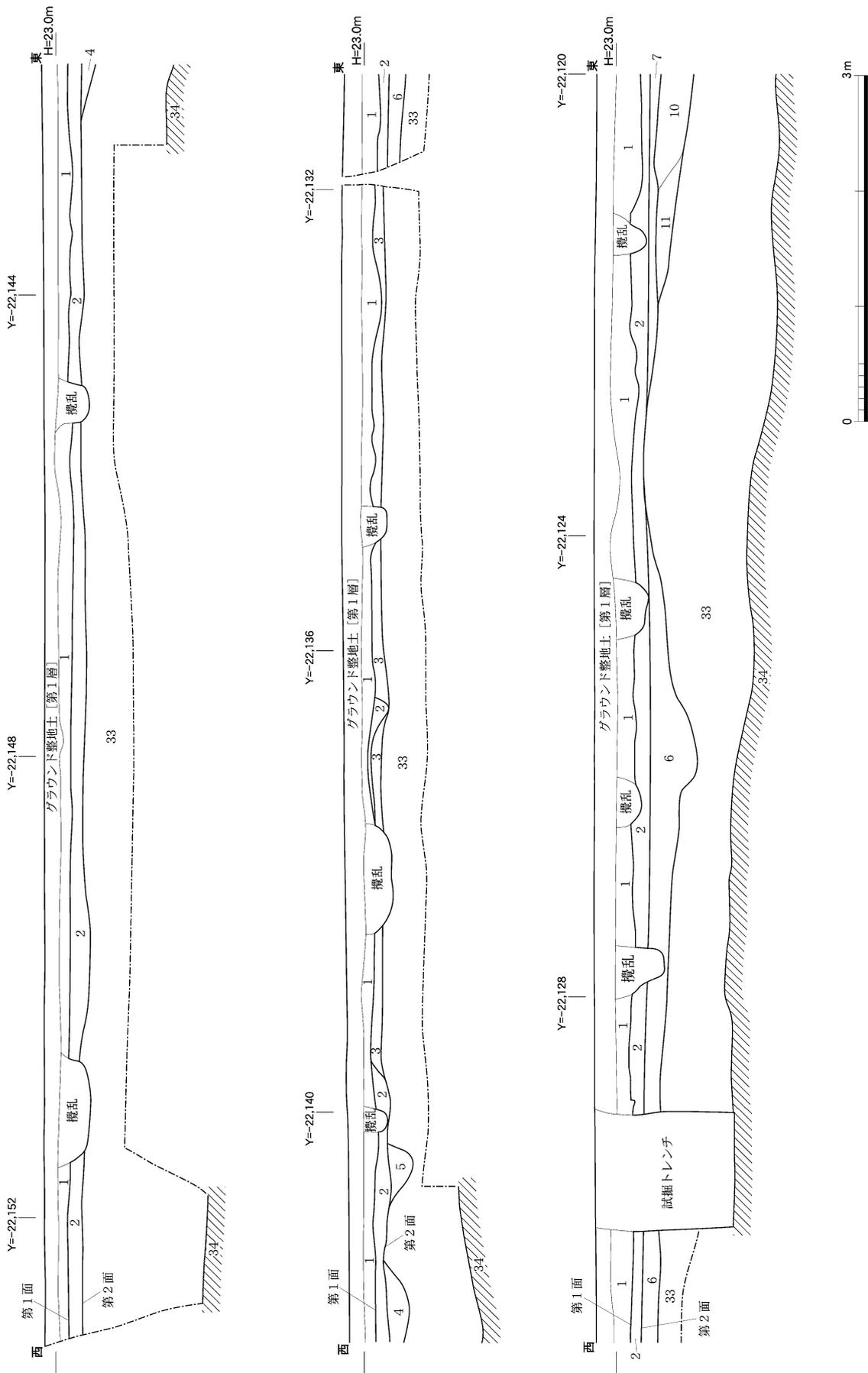


図6 調査区北壁断面図1 (1:50)

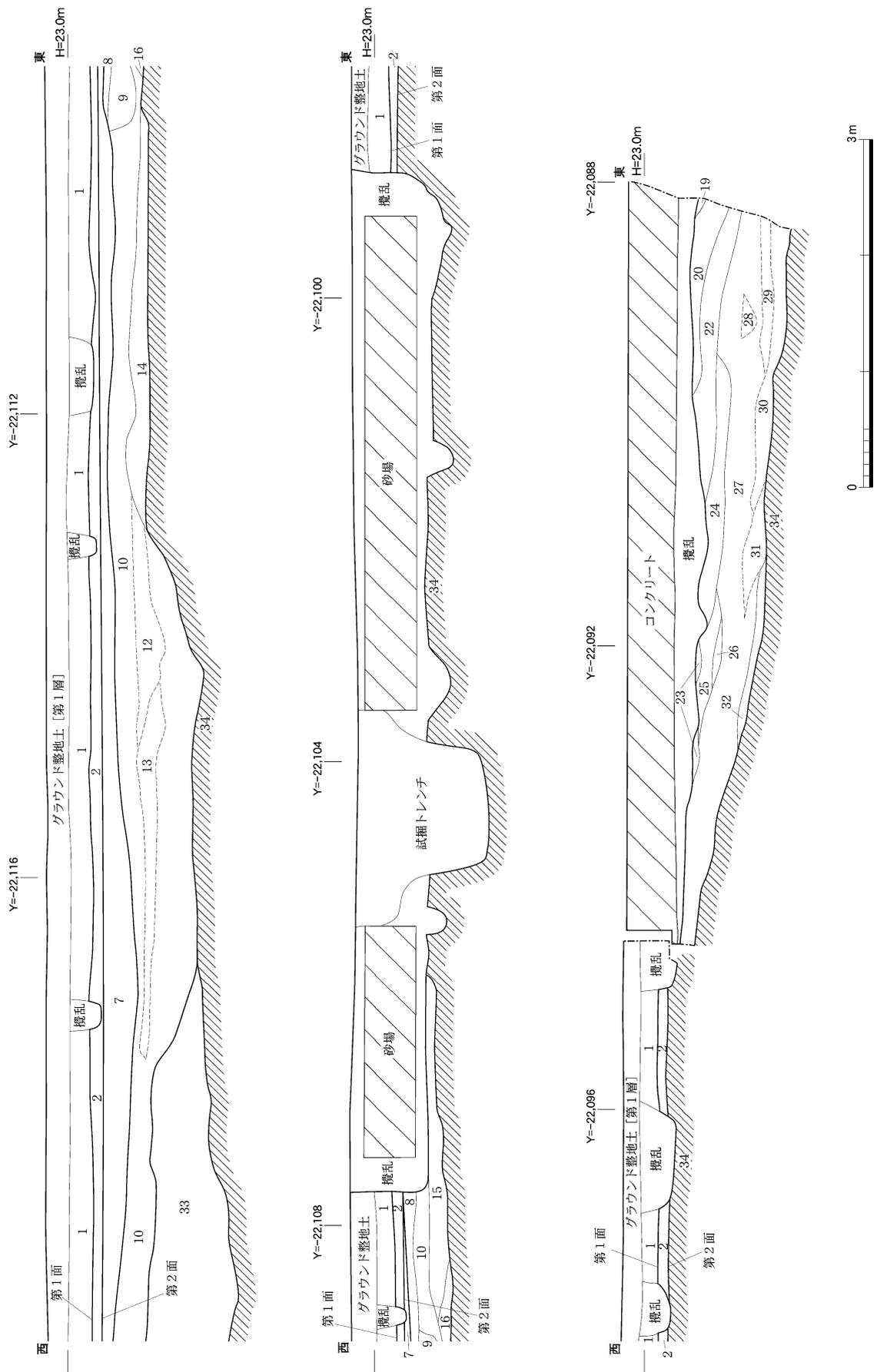


図7 調査区北壁断面図2 (1:50)

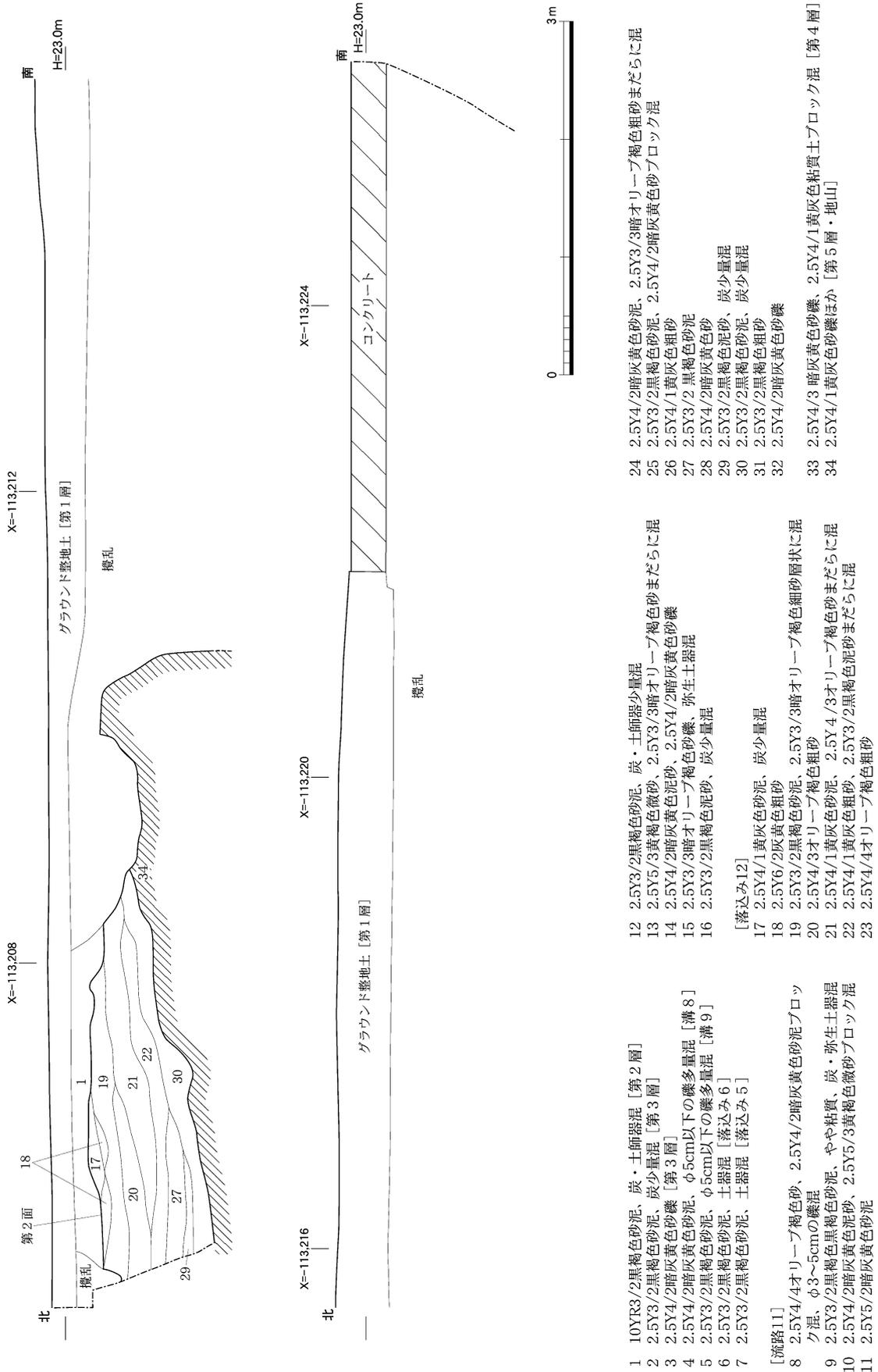


図8 調査区東壁断面図 (1:50)

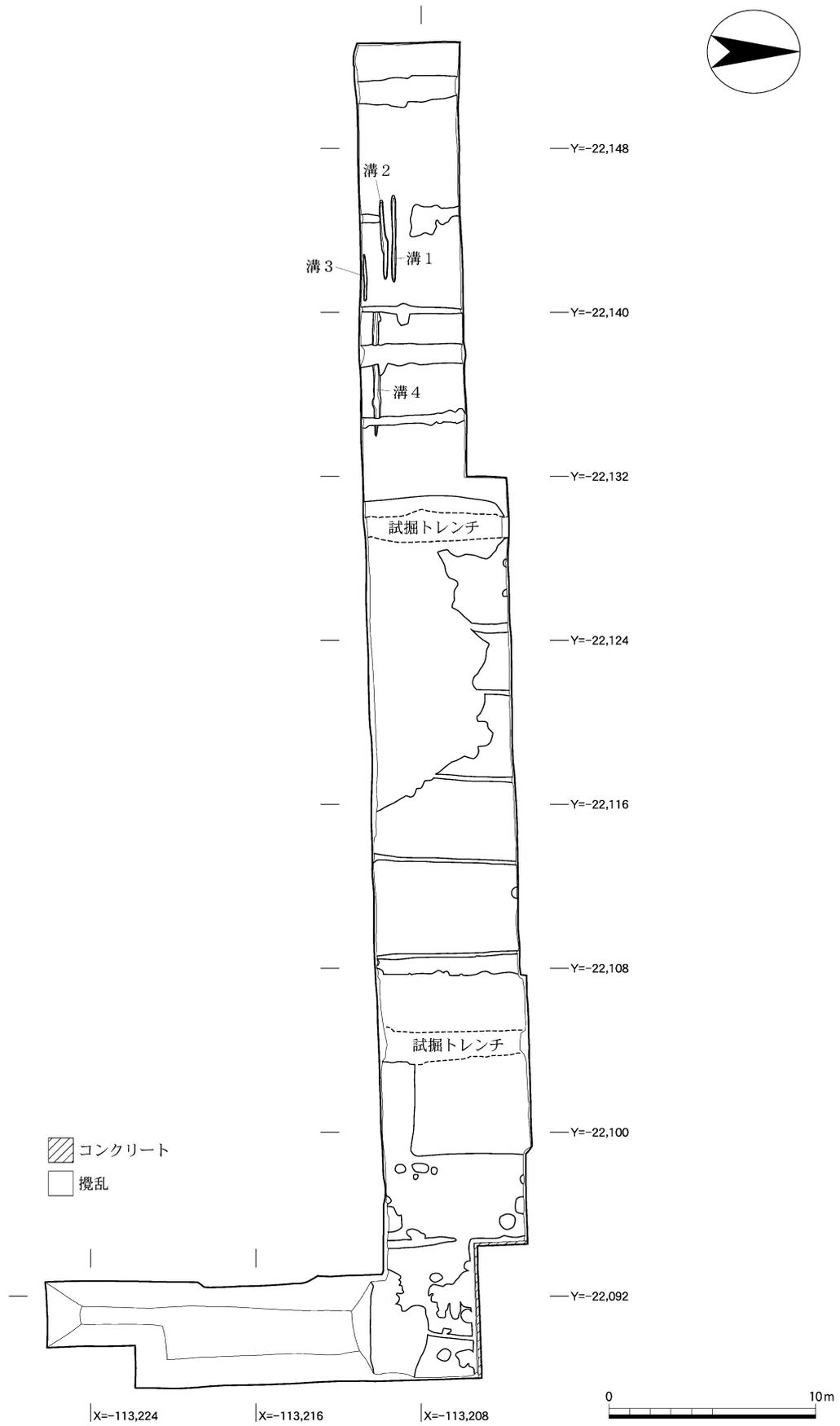


図9 第1面遺構平面図 (1 : 300)

第2-1面

第2-2面

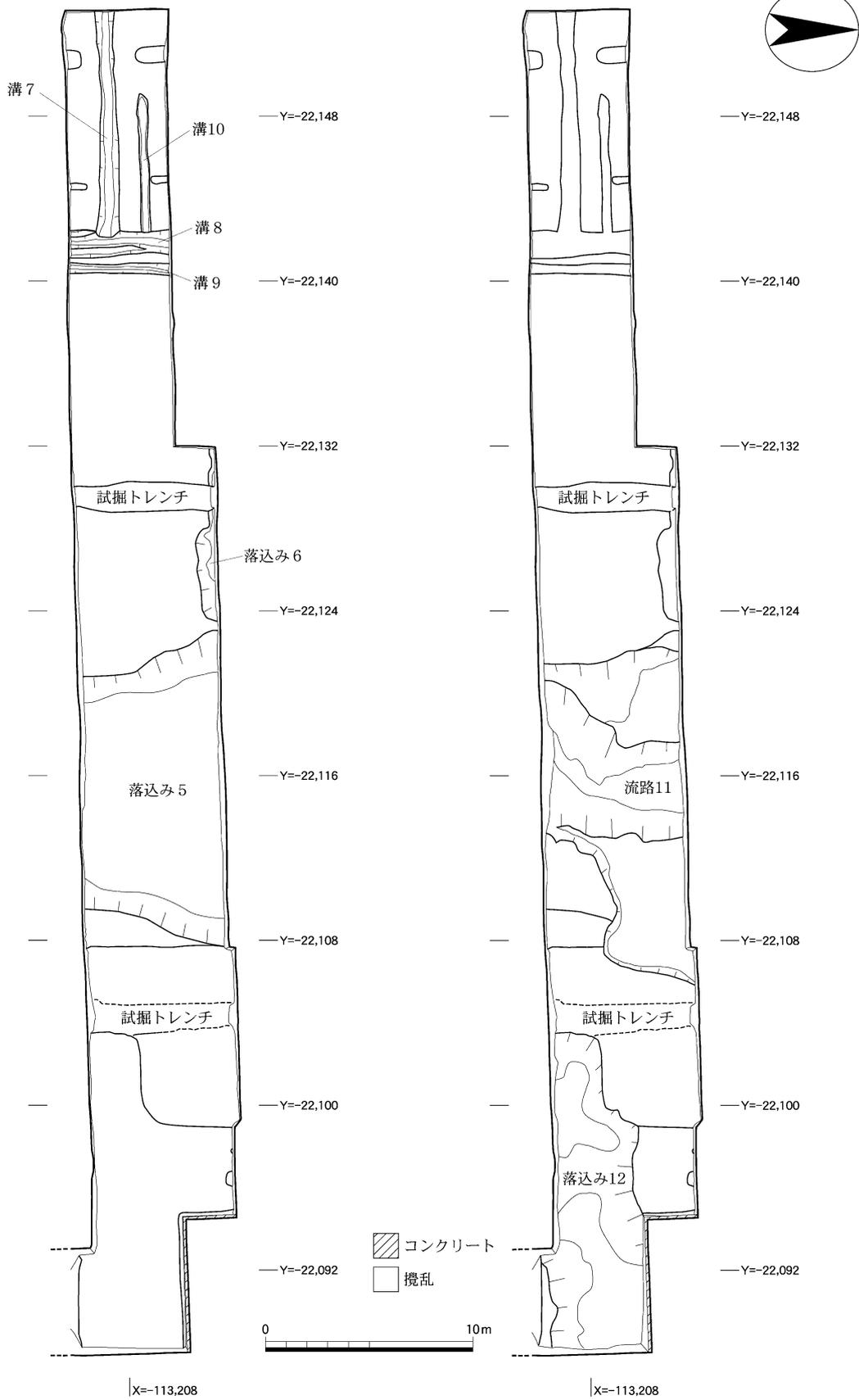


図10 第2面遺構平面図 (1 : 300)

### (3) 第1面の検出遺構 (図9、図版1-1)

溝1～4 調査区西部で検出した東西方向の溝で、攪乱などで掘削されたため断続的に存在する。平面形は幅0.2～0.3mで、深さは0.1～0.2mで、3～6m程度残存した。埋土は灰色泥砂である。埋土中から土師器・陶器・磁器などが出土した。

### (4) 第2-1面の検出遺構 (図10、図版1-2)

落込み5 調査区中央部で検出した落込みで、南北両側は調査区外で南側中央部は攪乱で削平される。平面形は北側東西幅約15m・南側東西幅約11mの不定形で、深さは0.5～1mである。肩はなだらかで、底部は凹凸があり一定ではない。埋土は黒褐色砂泥である。埋土中から土師器・須恵器・陶器・磁器・土製品などが出土した。

落込み6 落込み5の西側で検出した落込みで、北側は調査区外に続く。平面形は北側幅8.5m以上の不定形で、深さは約0.3mである。肩はなだらかである。埋土は黒褐色砂泥である。埋土中から土師器・陶器・磁器などが出土した。

溝7・10 調査区西部で検出した東西溝である。幅0.4～1.1m、深さ0.1～0.2m、埋土は暗灰黄色砂泥である。埋土中から土師器・陶器などが出土した。

溝8・9 調査区西部で検出した南北溝である。幅0.5～1.1m、深さ約0.2m、埋土は暗灰黄色・黒褐色砂泥である。埋土中から土師器・陶器などが出土した。

### (5) 第2-2面の検出遺構 (図10、図版1-2)

流路11 (図版2) 調査区中央、落込み5の下層で検出した南北方向の流路である。南側は南北方向であるが、北側はゆるやかに東側へ屈曲する。南北両側は調査区外である。断面形は両肩は緩やかに落ち、中央部はU字形に窪む、東西幅は北側で約16m、南側で約8m、深さ0.7～1.3mである。埋土は暗黄灰色泥砂が主体で、黄灰色微砂・黒褐色砂泥などが層状に堆積し、堆積の状況から水流の痕跡と推定できる。埋土中から縄文土器・弥生土器・須恵器などが出土した。

落込み12 調査区東部で検出した落込みで、北東側・東側・南側は調査区外に続く。平面形は東西幅約15m以上の不定形で、深さは約0.8mである。北肩・南肩はなだらかに落ち、底部は凹凸があり一定ではない。埋土は、黒褐色砂泥が主体で、黄灰色粗砂・黒褐色細砂・黒褐色泥砂などがレンズ層状に堆積する。埋土中から弥生土器・石器などが出土した。

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要

遺物は整理箱にして17箱出土した。土器類が大半を占め、他の遺物はごくわずかである。遺物の時期は縄文時代から近世に至るが、弥生時代が大半を占め、他の時代の遺物は少量である。

縄文時代の遺物には土器・石器などがあり、第3層・流路11・落込み12から少量出土した。弥生時代の遺物には土器・石器などがあり、第3層・落込み5・流路11・落込み12や後世の遺構から多数出土した。古墳時代から飛鳥時代の遺物には土師器・須恵器・土製品などがあり、流路11・第4層・後世の遺構から少量出土した。平安時代の遺物には土師器・須恵器・平瓦・土馬などがあり、落込み5などから少量出土した。中世以降の遺物には土師器・陶器・磁器・銭貨・フイゴ羽口・鋳型などがあり、落込み5・溝・第3層などから少量出土した。以下、縄文土器、弥生土器、石器を中心に報告する。

### (2) 土器類

#### 1) 縄文土器 (図11、図版3-1)

深鉢形土器(1~9) 深鉢は、口縁部が直立するものと、やや内傾するものがある。胴部が張るもの(2)もある。口縁部外面に断面三角形の突帯を貼り付けるもの(2~9)が多く、上面に刻目を施すもの(2~8)が多い。成形は粘土紐を積み上げ、内外面の調整はヨコナデのものと、二枚貝条痕を施すものがある。色調は黄褐色から灰褐色で、胎土は径0.5~2mmの石英・長石・チャー

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代	縄文土器、石器		縄文土器11点、石器2点	少量	0箱
弥生時代	弥生土器、石器		弥生土器104点、石器2点	19箱	0箱
古墳時代 ~飛鳥時代	土師器、須恵器、土錘		土師器1点、須恵器2点、土錘1点	少量	0箱
平安時代	土師器、須恵器、土馬、平瓦		土馬1点	少量	0箱
中世以降	土師器、瓦器、陶器、磁器、銭貨、フイゴ羽口、鋳型			少量	0箱
近世以降	土師器、陶器、磁器			少量	0箱
合計		27箱	124点(8箱)	19箱	0箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、出土時より10箱多くなっている。

トを多く含むもの（1・3・6・8）、灰白色を呈し径2mm以下の石英・チャートなどを多量、径0.5mmの雲母をごく少量含むもの（2・5・7）がある。4・9は暗褐色で、胎土は径1mm以下の雲母・角閃石を多量、径2mmの石英を極少量含む、いわゆる生駒西麓産の胎土とみられる。外面にススが付着するものも多い。

1はRLとみられる緩い縄文を施文した上に、右上から左下へ向かって弧を描く隆帯を張り、その上部を斜めに細かく刻む。下部にも横方向の隆帯がある。2は内面ナデ調整であるが、粘土接合痕とその後のユビオサエ痕が明瞭に残る。突帯上の刻みは板状工具による間延びしたD字で、刻みの間隔が広い。3は断面三角形の突帯を作り、上面に細かい刻みを施す。4は口縁端部を丁寧に面取りする。突帯上は板状の工具でD字の刻みを施す。5は口縁端部は粗い面取りを行い、突帯上は板状工具による間延びしたD字を刻む。外面は右から左方向のケズリ調整を施す。6は口縁端部を折り返して、断面下膨れの突帯を作る。突帯上を細かいD字刻みを施す。7は突帯上の刻みは間延びしたD字で、二枚貝のような先端が凹凸の工具を使用する。8は突帯上はユビを使用したO字の刻みを施す。9は口縁端部外面に折り曲げて突帯を作る。

浅鉢形土器（10・11） 10は肩部が「く」の字に屈曲し、4単位の波状口縁が大きく外反し、口縁内面に削出隆帯が付く。波頂部の隆帯直下に、焼成前の円孔があり、孔周りが剥離する。調整は内外面ミガキである。色調は外面がにぶい黄褐色、内面の一部が黒色。胎土は径1mm以下の石英・長石・チャートを多量に含む。11は肩部が逆「く」の字に内屈し、口縁端部をわずかに立ち上げる。内外面はヨコミガキである。外面は黒褐色、内面は褐灰色。胎土は径0.5mm以下の雲母を多量、径1～2mmのチャートを少量含む。

時期は、1が中期前葉の鷹島式から船元Ⅱ式、4・5・10・11が晩期後葉の船橋式、2・7・8が船橋式から長原式、3・6・9が晩期末の長原式に比定できる。

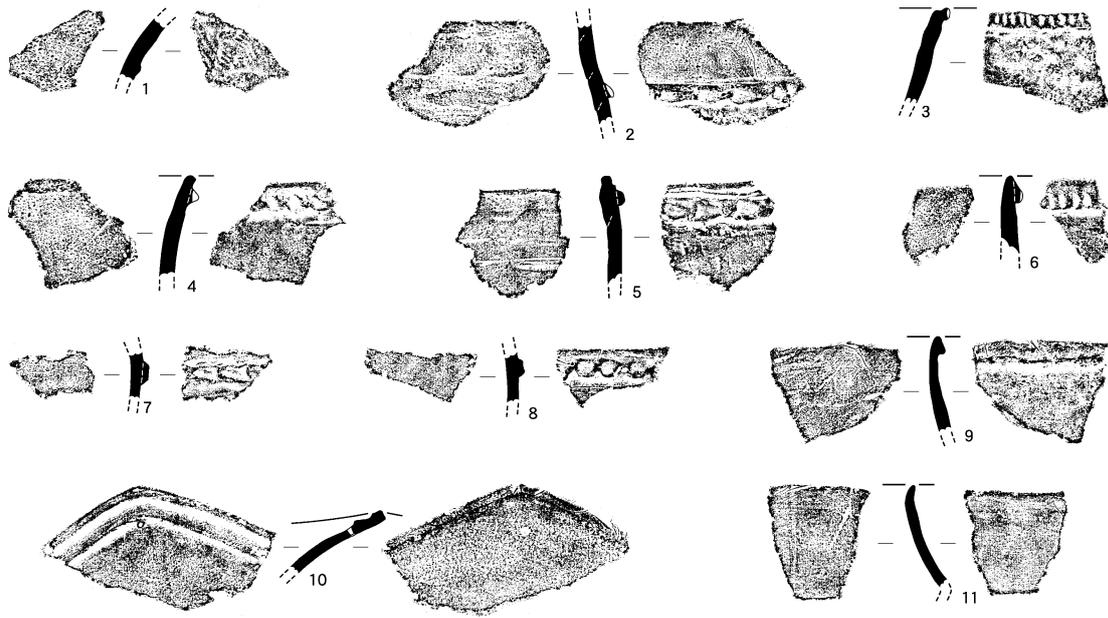
1・4・6・10・11は第3層、2・9は流路11、3・5・7・8は落込み12から出土した。

## 2) 弥生土器（図11～15、図版3～6）

壺形土器（12～23・37～47・63～81・101～112） 底部は大半が平底であるが、凹底のものもある。体部は扁平なもの、球形のもの、長胴のものがある。口縁部は頸部からすぐに外反するものと、体部から頸部にかけてやや直立して口縁が外反するもの、体部が張り肩部が外反気味に立ち上がるもの（39）がある。口縁端部は丸く収めるものと角張るものがあり、端部に沈線を施すもの（102・68）もある。

頸部・肩部・体部の文様は、口縁端部を折り返し段を作るもの（101）、無文のもの、ヘラ描沈線のもの（12・14・37・38・40・41・44・45・64・65・70～73・77・105・107・110）、段を作るもの（43・69・109）、段+ヘラ描沈線のもの（21）、削出突帯のもの（18）、貼付突帯のもの（74・75）、貼付突帯で上面に刻目を施すもの（22・39・42・76・111）、削出突帯上にヘラ描沈線のもの（19・63）、ヘラ描沈線間に木の葉文を施すもの（106）、ヘラ描沈線間に斜行沈線を施すもの（108）、ヘラ描沈線間に斜格子文を施すもの（46）、凹線文を施すもの（17）な

縄文土器



1・4・6・10・11 第3層  
 2・9 流路11  
 3・5・7・8 落込み12

弥生土器 第3層

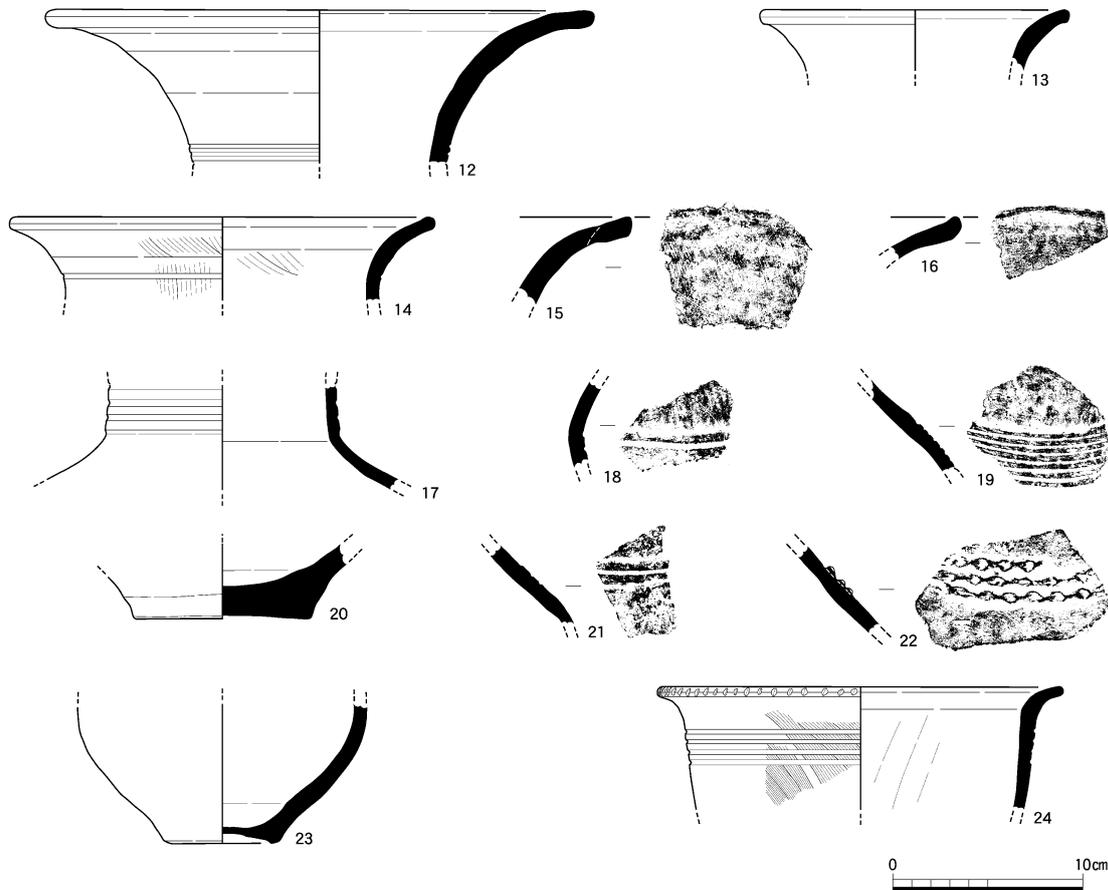
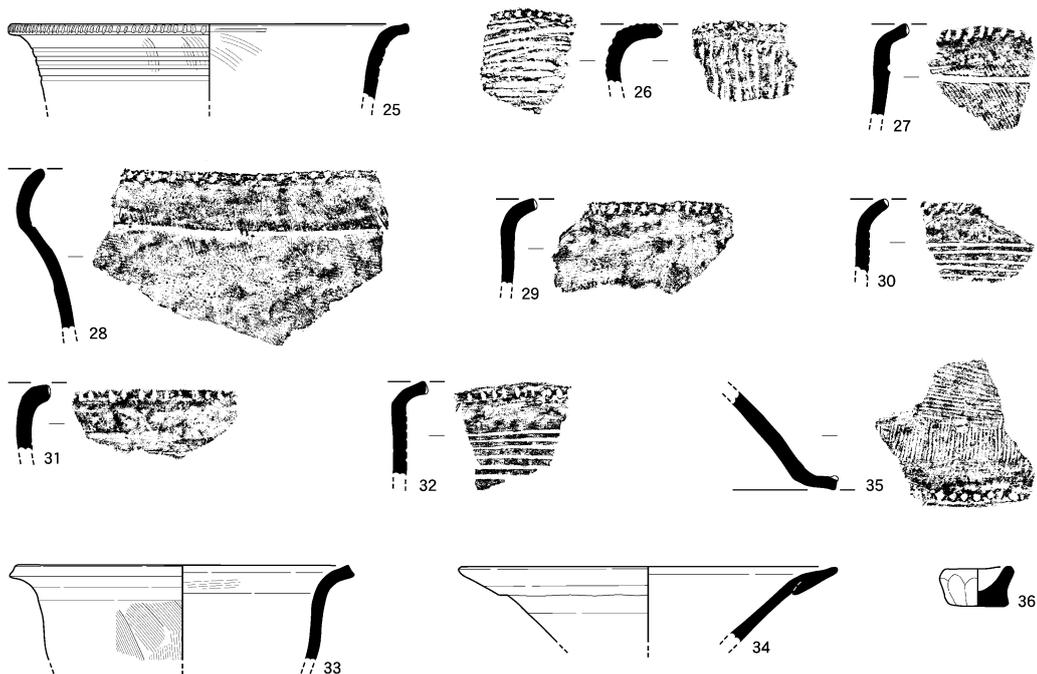


図 11 縄文土器・弥生土器拓影・実測図 (1 : 4)

第3層



落込み5

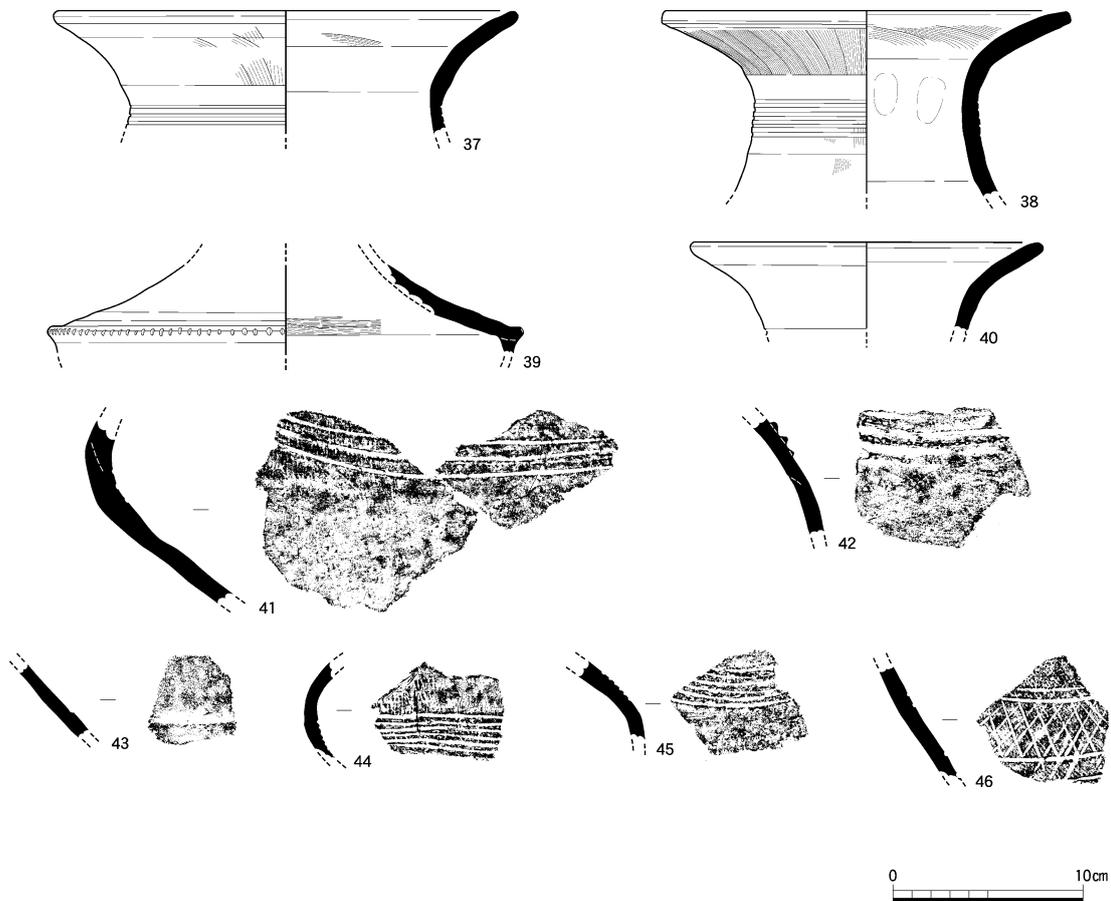
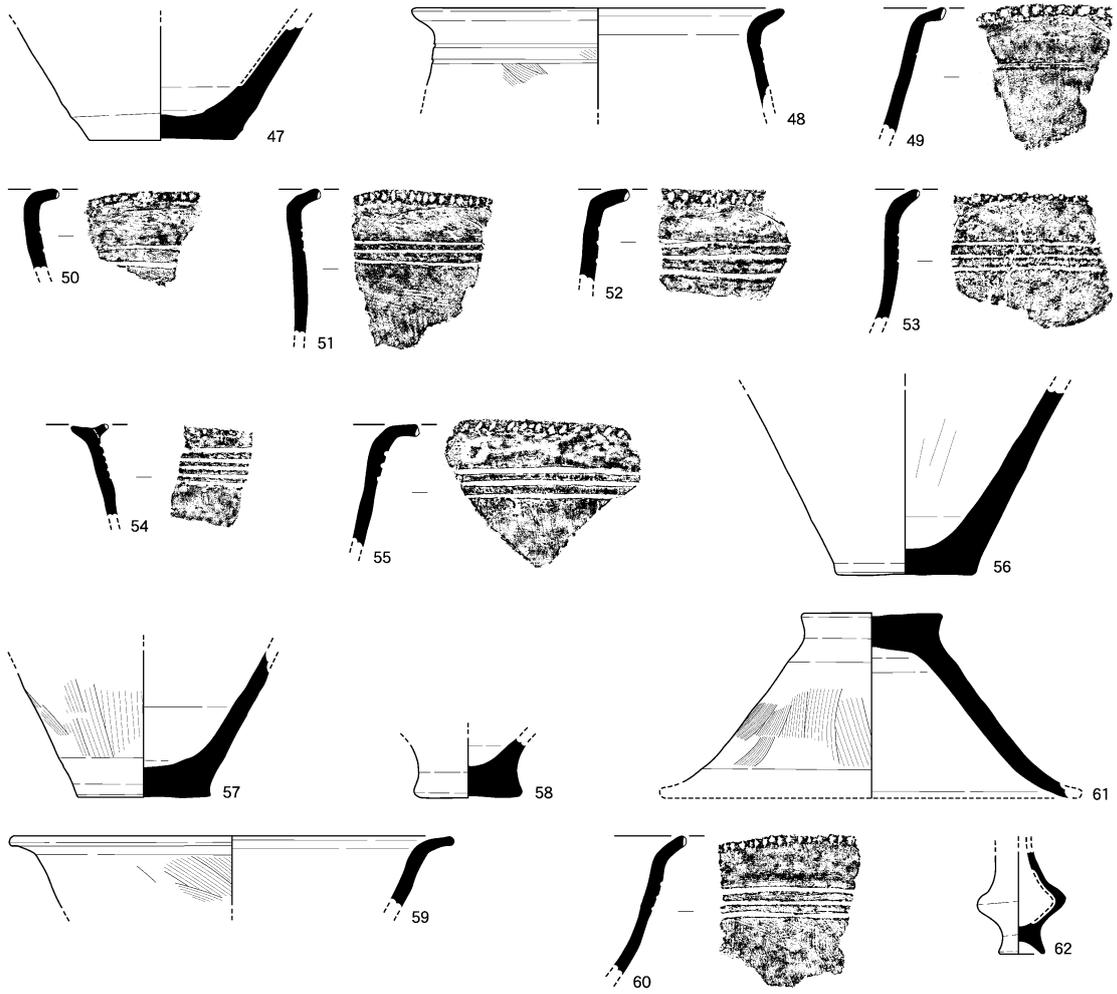


図12 弥生土器拓影・実測図（1：4）

落込み5



流路11

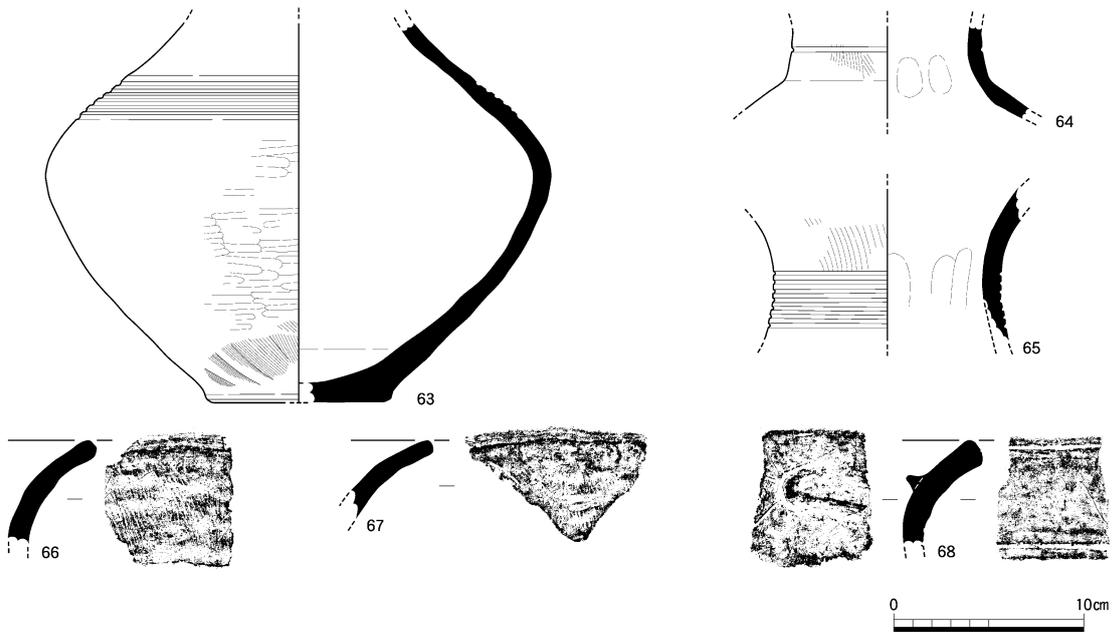


図13 弥生土器拓影・実測図(1:4)

流路11

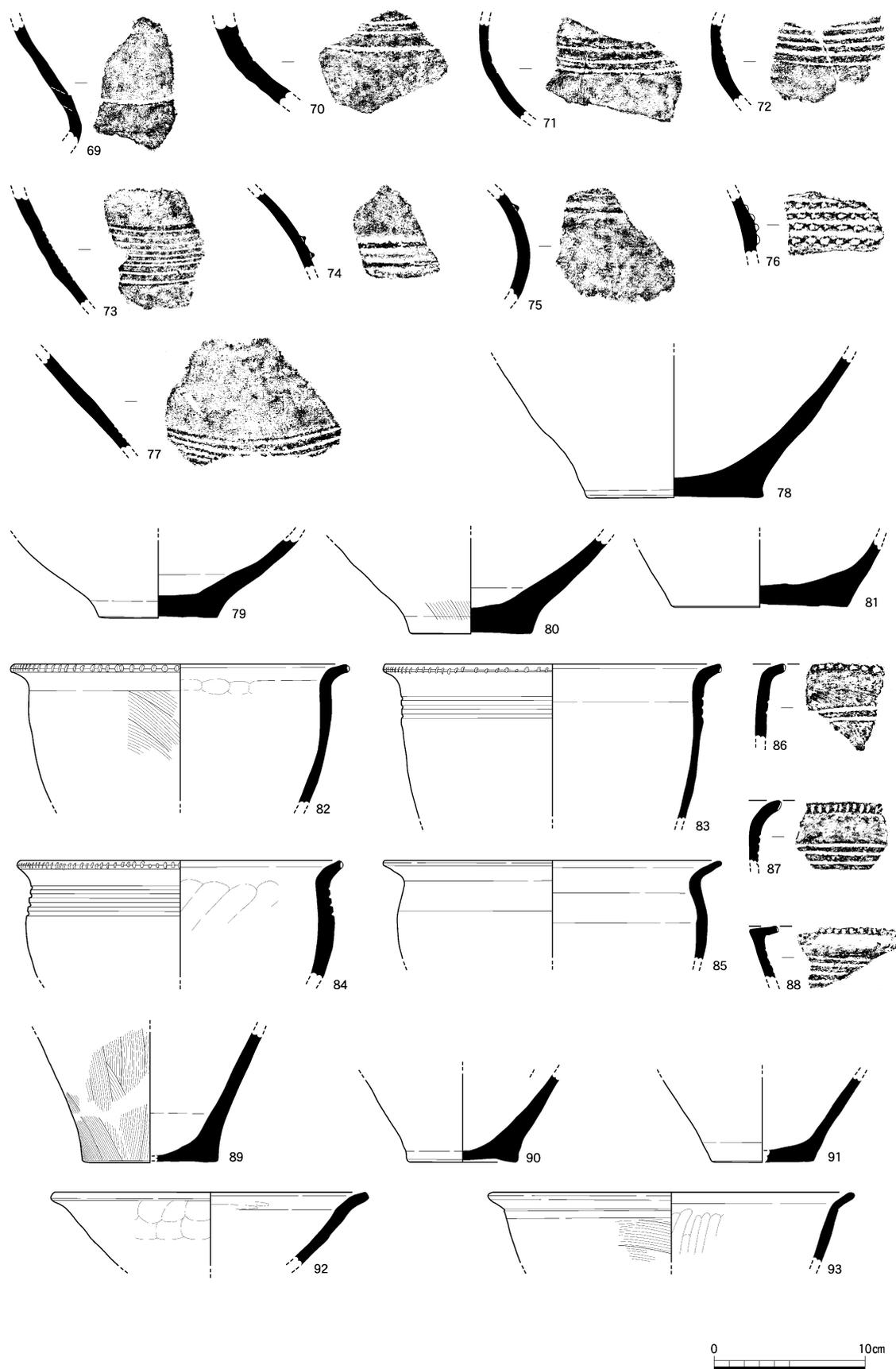
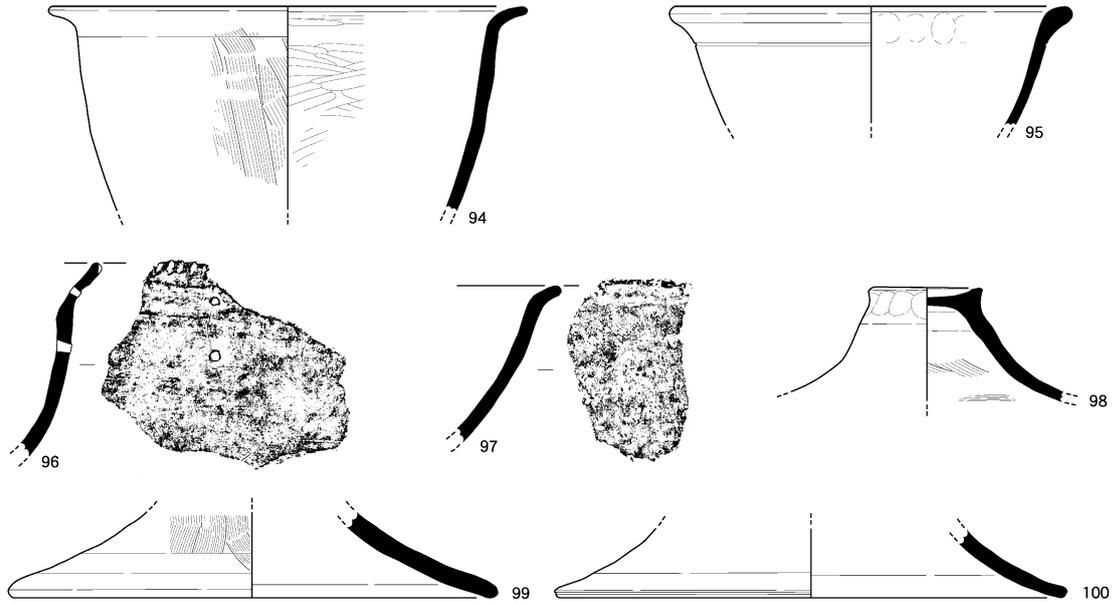
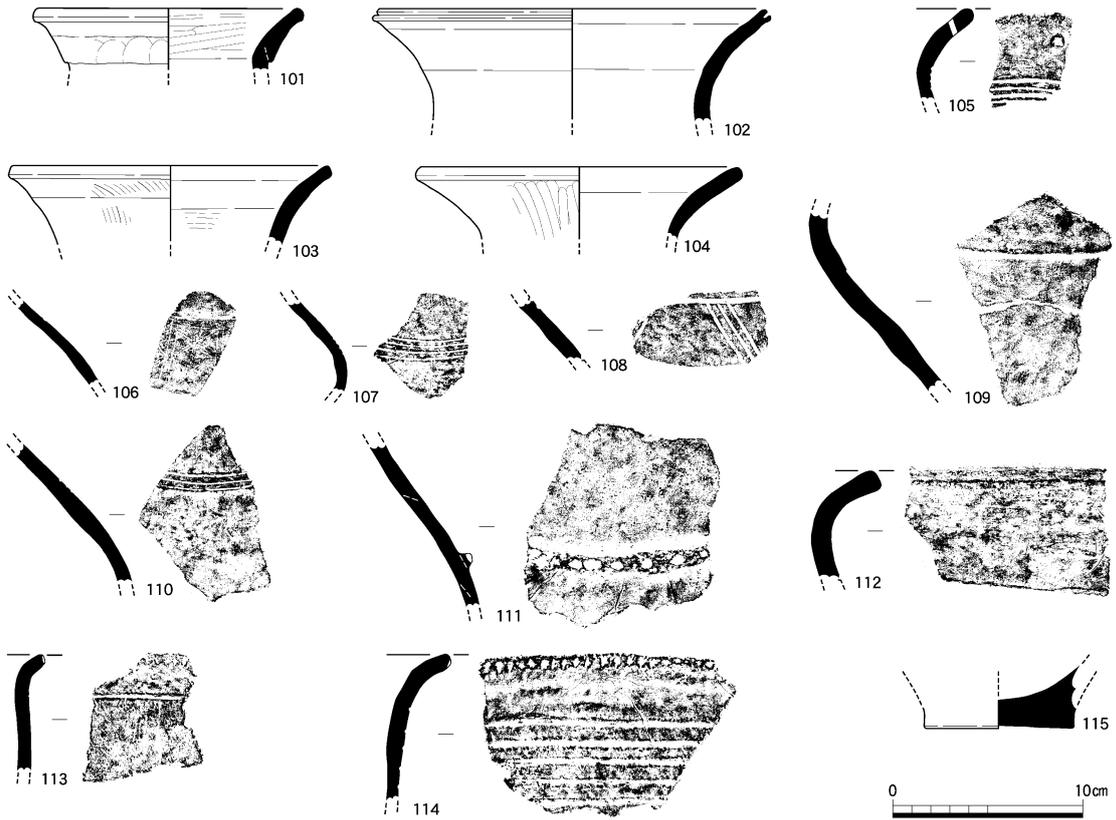


图14 弥生土器拓影・实测图 (1:4)

弥生土器 流路11



弥生土器 落込み12



古墳時代から飛鳥時代の土器

117 落込み5 116・118 流路11



図 15 弥生土器・土師器・須恵器拓影・実測図 (1 : 4)

どがある。また、口縁内面に鈎針形突帯を貼り付けるもの(68)もある。

成形は粘土円板を底部としてその上に粘土紐を積み上げるものが多いが、底部から粘土紐を積み上げるものもある。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ、外面はハケ目を施すものが多いが、口縁部外面にハケ目を施すもの(37・38・44・66・67)、口縁部外面や体部外面にミガキを施すもの(12・13・41・63～65・69・73～75・77・103～105・109～111)も多い。

色調は赤褐色から黄褐色で、胎土は石英・長石・チャートを多量に含むもの、灰白色で石英・チャートを含むものなどがある。外面に黒斑が付いたものもある。

甕形土器(24～32・48～58・82～91・113～115) 底部は大半が平底であるが、凹底のものもある。口縁部は「く」の字状に緩やかに外反するものが多いが、急角度で外反するもの(26・32・49・50・52・55)、逆「L」字状のもの(54・88)などがある。口縁端部は丸く収めるものと角張るものがあり、大半が刻み目を施す。体部は張らないものが多いが、体部がやや張るもの(28・48・54・84・85・88)もある。体部の文様は、無文のもの(29・82・85)、段を作るもの(28)もあるが、ヘラ描沈線のもの(24・25・27・30・32・48～55・83・84・86～88・113・114)が多い。

成形は壺と同じく粘土円板成形のものが多く、底部から粘土紐を積み上げるものもある。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ目、内面はナデまたはオサエを施すものが多い。口縁部内面に横方向、外面に縦方向の条痕を施すもの(26)もある。

色調・胎土は、赤褐色から黄褐色で石英・長石・チャートを多量に含むもの、灰白色で石英・チャートを含むものなどがある。大半の土器は、外面にススが付着する。

鉢形土器(33・34・59・60・92～97) 平底で体部は内弯し、口縁部は大半がくの字状に緩やかに外反するが、直立するものもある。口縁端部は丸く収めるものが多いが、角張るもの(33)、肥厚するもの(95)があり、端部に刻み目を施すもの(96)もある。

体部の文様は、口縁端部を折り返し段を作るもの(34)、無文のもの(33・59・92・94・96・97)、ヘラ描沈線のもの(60・93・95)などがある。

成形は壺と同じく粘土円板成形のもの、底部から粘土紐を積み上げるものがある。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はハケ目、内面はナデを施すものが多いが、外面ミガキ(95)、内面ミガキのもの(93・94)もある。

色調・胎土は、赤褐色から黄褐色で石英・長石・チャートを多量に含むもの、灰白色で石英・チャートを含むものなどがある。34は口縁内面にススが付着する。

蓋形土器(35・61・98～100) 蓋には甕用の大型のものがある。笠形で、天井部は凹み、裾部は大きくひらく。裾端部は丸く収めるもの、角張るものがあり、端部に刻み目を施すもの(35)、沈線を施すもの(100)もある。裾部に文様を施すものはない。

成形は、天井部から粘土紐を積み上げる。裾端部内外面はヨコナデ、体部内面ナデ、外面ハケ目を施すものが多いが、端部ハケ目のもの(35)や、外面ナデ(98・100)、内面ハケ目(98)のものもある。

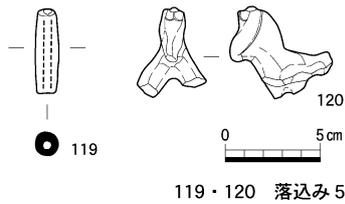


図 16 土製品実測図 (1 : 4)

色調・胎土は、赤褐色から黄褐色で石英・長石・チャートを多量に含むもの、灰白色で石英・チャートを含むものなどがある。口縁内面にススが付着するものもある。

小型土器 (36・62) 鉢形のもの (36) と、壺形のもの (62) がある。いずれも無文で、62 は高台が付く。いずれも手捏ね成形で、内外面ナデを施す。36 は黒褐色で胎土は長石を多く含み、

62 は淡橙色で石英・長石などを多く含む。

時期は、前期第 I 様式新段階が大半を占めるが、34・101 などが前期第 I 様式古段階、43・80・109 などが中段階、17・35・56・57・59・89・92・85・46 などが中期に比定できる。

12～36 は第 3 層、37～62 は落込み 5、63～100 は流路 11、101～115 は落込み 12 から出土した。

### 3) 古墳時代から飛鳥時代の土器 (図 15)

土師器高杯 (116) 底部は平坦で、体部は外上方にのびる。調整は不明である。

須恵器杯 (117) 底部は平坦で、体部は外上方に直線的にのびる。内外面の調整は回転ナデで、底部外面に回転ヘラケズリを施す。

須恵器杯蓋 (118) 天井部はふくらみ、端部は内弯気味に垂下する。内外面の調整は回転ナデで、天井部上面は不調整である。

時期は、TK 15～TK 217 に比定できる。117 は落込み 5、他は流路 11 から出土。

### (3) 土製品 (図 16)

土錘 (119) 小型で円筒形の土錘である。調整はナデである。

土馬 (120) 都城型土馬で小型である。粘土塊から四肢をつまみ出し折り曲げる。粘土板を折り曲げて頸部を挟み、頭部とする。竹管を押して目を作る。頭部上端と四肢は欠損する。

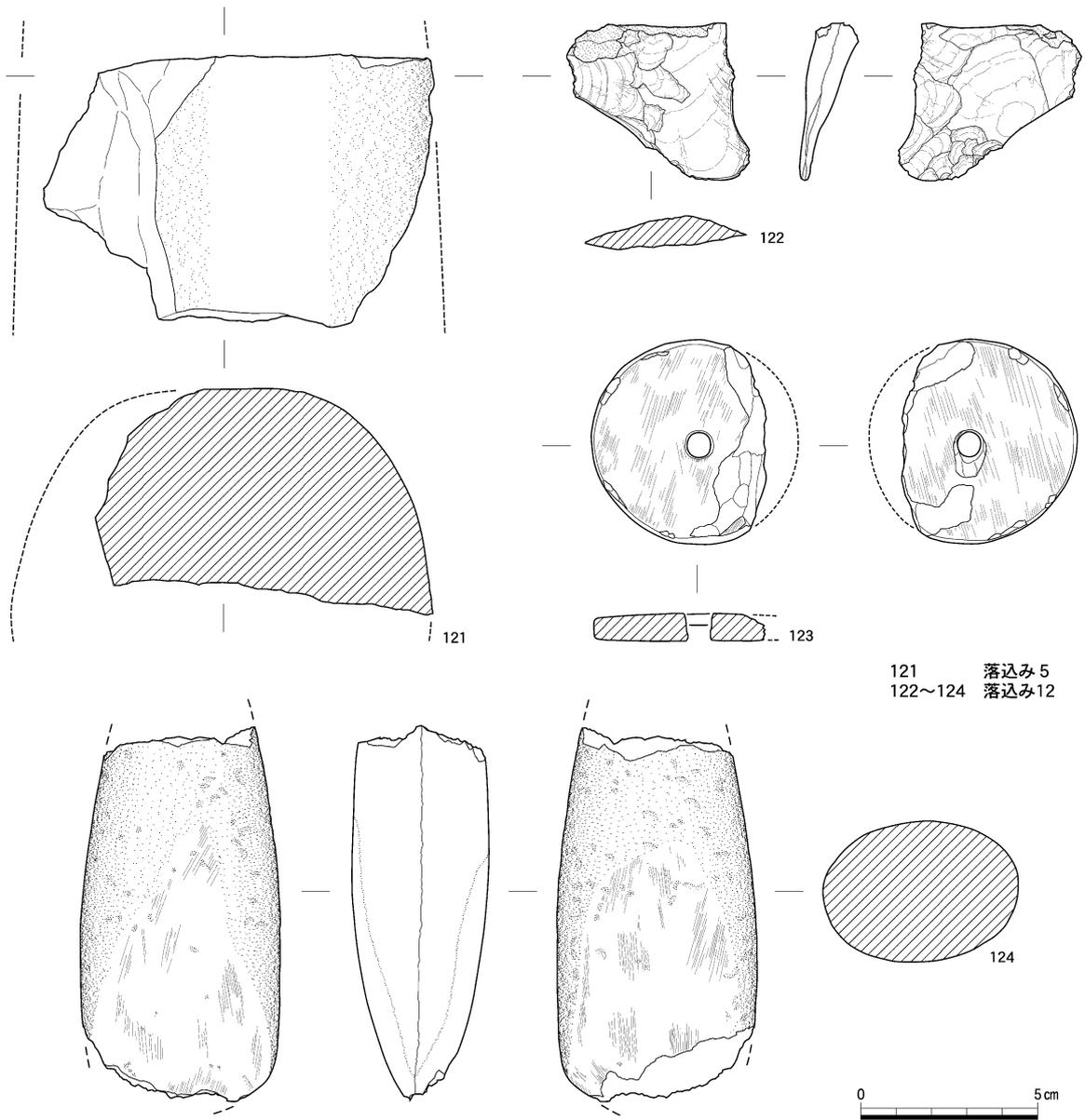
時期は、119 が古墳時代、120 が平安時代である。いずれも落込み 5 から出土。

### (4) 石器 (図 17、図版 6-2)

石棒 (121) 断面は楕円形と推定できる。側面を丁寧に研磨する。材質は砂岩である。

剥片 (122) 上部に自然面が残る。主要剥離面には左側からの剥離と押圧剥離が認められる。背面には右下や左上からの多くの剥離があることから、石核の表面であった可能性がある。材質はサヌカイトで、重さ 19 g である。

紡錘車 (123) 円形で、中心よりやや下部に円孔がある。調整は表裏面と側縁を丁寧に研磨する。円孔は両側から穿孔する。孔内面に筋状の窪みが数条入り、穿孔の工具痕とみられる。裏面の孔の周りが剥離し、表面の孔の周りでも擦痕が一部で確認でき、紐を通した使用痕と考えられる。材質は結晶片岩である。重さ 40 g である。



121 落込み5  
122~124 落込み12

図17 石器実測図（1：2）

石斧（124）柄部断面は楕円形を呈し、刃部は両凸刃で半円形である。全面を細かい敲打痕で成形と表面調整し、刃部を研磨する。研磨の際にできる擦痕や使用痕もほとんど確認できない。材質は緑灰色砂岩質である。重さ42gである。

時期は、121・122が縄文時代、他は弥生時代である。121は流路11、他は落込み12から出土した。

## 5. ま と め

ここでは、これまでの周辺調査の成果も含め、時期ごとに変遷をまとめておく。

縄文時代から飛鳥時代 本調査では、遺構は検出できなかったものの、縄文時代の土器・石器が少量出土した。時期は、晩期後葉のものが主体であるが、他の時期のものもある。遺物の磨滅が少ないことから、調査地周辺に当該期の集落が想定できる。

弥生時代から飛鳥時代の遺構は、落込み・流路を検出したが、周辺調査では弥生時代の溝・古墳時代の竪穴住居などが検出されている。遺物の出土量が多く、土器の磨滅が少ないことから、周辺に当該期の集落が想定できる。遺物は、第Ⅰ様式新段階のものが主体をなすが、古段階・中段階や中期のものも少量見られる。これらの弥生時代の遺物は縄文時代晩期の遺物と伴出し、縄文時代晩期から弥生時代中期まで集落が継続して営まれたことを示唆する。

今回の調査では、下鳥羽遺跡・雲宮遺跡などとともに、京都盆地における弥生文化の波及状況を明らかにするうえで、大きな成果が得られたといえよう。

また、集落は鴨川の扇状地上の微高地に展開したと推定できる。鴨川右岸には烏丸丸太町遺跡・烏丸御池遺跡・烏丸綾小路遺跡・烏丸町遺跡などが北東から南西に並ぶ。これらの鴨川右岸遺跡群は、京都盆地東部の遺跡の在り方を考えるうえで興味深い。

平安時代以降 本調査では、平安時代の遺物が落込み5などから少量出土したが、明確な遺構は検出できなかった。このことから、九条大路は造られていたが削平されてなくなった、大路幅員が右京八条大路（幅5m<sup>11)</sup>と同じ様に設計上12丈（36m）よりも狭かった、あるいは平安時代には敷設されていなかったなどの要因が考えられるが、現状では不明である。周辺の調査では、当地域は平安時代前期・中期段階まで湿地が広がり、自然流路が幾筋も流れていたことを確認しており、八条大路・九条坊門小路・信濃小路・烏丸小路などは、いずれも平安時代後期から鎌倉時代になって敷設されたと推定されている<sup>12)</sup>。

ただ、左京九条東側の鴨河には「辛橋」が架けられていた記録がある〔『三代実録』元慶三年（879）九月二十五日条〕。この橋は要路として利用されていた〔延喜二年（902）七月太政官符〕ことから、辛橋に継続する道路には「唐橋小路」と別称された九条坊門小路と信濃小路のいずれかが当てられ〔『掌中歴』・『拾芥抄』〕、この道路だけは早くから敷設された可能性もある。しかし、実際に調査で検出した道路は後世のものであり、敷設時期については定かでない。

いずれにしても、平安京南東域における条坊道路は、時期により複雑な様相を呈していたことが指摘できよう。

また、現在の九条通の北側では江戸時代の九条通北側溝を検出しており、近世には九条通が存在したことは確認できるが、道幅が狭く南側溝は今回の調査地までは達していなかったと推定できよう。

註

- 1) 山田邦和「左京」『平安京提要』角川書店、1995年。
- 2) 調査については、財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立会調査一覧』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1981年、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局、2007年などを参考にした。
- 3) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度、京都市文化観光局、1987年。
- 4) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成2年度、京都市文化観光局、1991年。
- 5) 註3と同じ。
- 6) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度、京都市文化観光局、1989年。
- 7) 引原茂治「平安京・烏丸町遺跡隣接地発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報 第48冊』京都府埋蔵文化財調査研究センター、1992年。
- 8) 百瀬正恒「左京九条三・四坊」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1988年。
- 9) 小森俊寛「左京九条三坊(1)・(2)」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1985年。
- 10) 小森俊寛・上村憲章「平安京左京九条三坊」『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所、1987年。
- 11) 平田 泰「右京八条二坊五町」『京都市内遺跡立会調査概報』平成4年度、京都市文化観光局、1993年
- 12) 山本雅和「平安京の街路と宅地」『平安京の住まい』京都大学学術出版会、2007年。



# 版 图



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうくじょうおおじあと・からすまちょういせき							
書名	平安京左京九条大路跡・烏丸町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2009-19							
編著者名	上村和直							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2010年4月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 くじょうおおじあと 九条大路跡  からすまちょういせき 烏丸町遺跡	きょうとしみなみくひがし 京都市南区東 くじょうしもとのだちょう 九条下殿田町  56	26100	1    759	34度 58分 45秒	135度 45分 28秒	2010年1月 4日～2010 年2月12日	486m <sup>2</sup>	学校新築 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
烏丸町遺跡  平安京左京 九条大路跡	集落跡	弥生時代 ～飛鳥時代	流路、落込み、包 含層	縄文土器、弥生土器、 石器、土師器、須恵器		弥生時代前期の土 器が多数出土した。		
	都城跡	平安時代	なし	須恵器、土師器、土馬、 瓦				
		中世	落込み、溝	土師器、陶器、磁器				
		近世以降	溝、畑の畝	土師器、陶器、磁器				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-19  
平安京左京九条大路跡・烏丸町遺跡

発行日 2010年4月30日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961